観光振興へ多彩な取り組み

ITセミナー・着地型旅行造成・地元産食開発など

てしかがえこまち推進協議会

てしかがえこまち推進協議会（会長・徳永町長）は、観光ITセミナーや新たな着地型旅行の開発など広範な事業を展開しました。

情報部会（山本和之部会長）では、ITによる観光振興や個別の事業者の情報発信の大切さ、その方法を学ぼうと、12月15日に摩周観光文化センターで「ITセミナー」を開催しました。

セミナーには、町内のホテルや旅館、体験事業者、飲食店など、関係者約30人が参加。講師は、日本最大級のインバウンドポータルサイト「やまとごころ」を運営するポータルジャパンCEOの村山慶輔さんで「インターネットの現在と今後の発展」をテーマに講演。「旅行形態が変化し、さらにインターネットの情報発信などが重要。旅行の事前情報取得方法のほとんどがウェブサイトから」と、観光産業にはインターネットが欠かせないツールの一つであると訴えました。また、ツイッターやフェイスブックなどのSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス／社会的ネットワークをインターネット上で構築するサービス）を積極的に活用すべきであるとアドバイスをしていました。

エコツーリズム推進部会（屈斜路湖プロジェクト（村上幸喜委員長）は、屈斜路湖を将来にわたってスポーツフィッシングのフィールドとして保全するため、遊魚者へ向けたメッセージ「魚を持って帰らないで！」と記された看板を、屈斜路湖の林道沿い2カ所に設置しました。同プロジェクトではこれまで、キャッチ&リリースを促すための「屈斜路湖フィッシング&マナーブック」を作成し、同湖を訪れる遊魚者へ配布するなどして、魚資源、自然資源の大切さを広く周知してきました。今回は、その一環として行われました。

環境・温泉部会（榎本浩士部会長）は、新しい着地型旅行として、経済産業省が認定している近代化産業遺産の硫黄山鉄道軌道跡を馬そりに乗って巡る「馬そりで行く硫黄山ヒストリーツアー」を造成しました。このツアーは「知られざる硫黄山鉄道探訪の旅」がテーマ。1877年頃から本格的に始まり、1963（昭和38年）頃まで続いた硫黄採掘の歴史をひも解きながら、硫黄山周辺の自然林の雪景色を楽しむことができ、馬そりに同乗したガイドが歴史を解説します。

馬そりを活用した新しい旅行商品

今回のツアーで馬そりを引くのは、ばんえい競馬で活躍し引退した町内の馬で、幾度となく繰り返した試験運行で安全が確認されたものです。この造成を受け、実際にツアーを実施するのは、馬そり実行委員会（長谷川義晃実行委員長）で、ツアーの申込先は㈱ツーリズムてしかが（白石悠浩社長）です。

㈱ツーリズムてしかがは、てしかがえこまち推進協議会から生まれた地域密着型旅行会社です。同社はこの度、町の新たな土産や食を開発しました。

屈斜路に寒冷地環境生物生産研究施設を持つ玉川大学と「たまがわはちみつ」を開発。発売を開始しました。このはちみつは、同研究施設内で栽培している「摩周そば」の花などからミツバチが集めたもので、その独特の香りが特徴です。毎年、ハチミツが採れる秋に、定番商品として販売していく予定です。非常に好評を得ており、既にこれまで町内外で約1千200個を販売済み。同社ほか、町内の土産品店などでも販売しています。

また、地元で生産している黒毛和牛を「屈斜路和牛」というブランドで商品化しようと、12月28日に川湯ふるさと館で試食会を開催しました。町内の優れた産品を地元で使い、地産地消を進めようという試みの一環です。町内では既に、ホテルや飲食店で地元産ジャガイモを使った料理が商品化されていますが、和牛は初めての取り組みです。この和牛は、屈斜路の鴨志田農畜産（鴨志田光栄代表）で生産しているものです。試食会には、町内の関係者約50人が出席し、ロースを使ったステーキとしゃぶしゃぶを試食しました。出席者のアンケートでは、非常に好意的な意見が大半を占めていました。当面は町内11の宿泊・飲食事業者がこの和牛を使った料理をメニュー化し、地域住民や観光客へ提供します。今後は町内の農畜産生産者と旅行業者、宿泊・飲食事業者らがタッグを組んで、弟子屈の食と観光を発信していきます。

てしかがえこまち推進協議会が観光地域づくりプラットフォームモデル事業

全国6地域に選定される

てしかがえこまち推進協議会は、官民一体かつ町民主導での地域づくりなどが先進的な取り組みとして評価され、観光庁が全国6地域で手掛ける「観光地域づくりプラットフォームモデル事業」の指定を受けました。同協議会がモデル事業に応募したものではなく、先進的な取り組みとして国が評価したものです。

その第1回目の会合が1月11日、弟子屈町商工会で開かれ、年度内に同協議会とその事業体である㈱ツーリズムてしかがの事業内容を振り返りながら、再検証することとなりました。

観光地域づくりプラットフォームとは、地域の多様な主体による着地型旅行商品の販売を担うワンストップ窓口により、地域と市場を結び付けるもので、同協議会と㈱ツーリズムてしかががその対象となります。

会議には関係者など25人が出席し、今後の進め方などについて意見を交換しました。年度内に2回の会議を開催し、同協議会と同社のこれまでの振り返りや連携の問題点などをワークショップなどを通じて検証するとともに、外部の専門家や大学の教授などからアドバイスを受けながら、今後5年間の事業計画をまとめることとしています。

弟子屈町インバウンド対策事業の補助交付先を募集中

町では2月15日㈫まで「インバウンド対策事業」への補助金交付先を募集しています。この事業は、町内に事業所を有し、インバウンド（訪日外国人観光客誘致）に取り組む事業者が自主的に行う訪日外国人観光客誘致活動に対し、予算の範囲内で補助を行うというものです。

既に町ホームページでもお知らせしていますが、これからインバウンドへの受け入れ対策をお考えの方は、ホームページをご覧いただくか、下記までお問い合わせください。

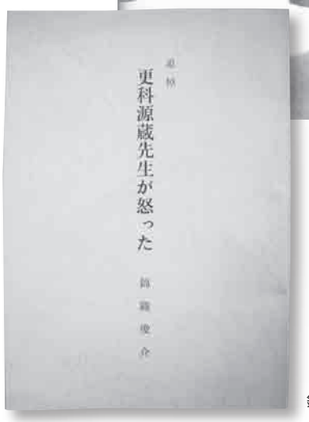
❑町ホームページ　http://www.town.teshikaga.hokkaido.jp/
❑役場観光商工課☎482－2940（課直通）

原野紀行

更科源蔵（さらしなげんぞう）
●1904（明治37）年、弟子屈町熊牛原野（南弟子屈）に生まれ、1985（昭和60）年に81歳で逝去。東京麻布獣医学校を中退した後、尾崎喜八、高村光太郎に師事し、詩作を中心に郷土史、アイヌ文化研究など主に文学活動を続けた。
▶弟子屈町で所蔵しているさまざまな資料を紹介する。

著書の検印などに使っていた自作のエゾシカ印

弟子屈尋常小学校高等科生徒と思われる子どもたちと錦織駿介
後ろから２列目右端（○で囲んだ）が錦織（小林俊夫氏所蔵アルバムから）



錦織駿介が著した冊子

『追悼　更科源蔵先生が怒った』

錦織俊介 著

更科が、1930（昭和5）年5月に屈斜路尋常小学校の代用教員になり、翌年の8月に解職されたことは何度かお話しました。同じ時代に弟子屈尋常小学校で正規の教諭をしていた錦織俊介が、更科の没後、この経緯を冊子にしています。

屈斜路尋常小学校は教員がいなくなり、後任の教員が赴任してこない状態にありました。村役場は、熊牛の学校の教員が資格を取りに行って留守の間、代用教員をしていたことのある更科に、その任を託しました。

更科は、屈斜路コタンの底抜けて明るく、正直でずるくないアイヌの人たちの子どもたちが通う学校に行けることを喜びます。屈斜路コタンの人たちも顔見知りで、誰とでも親しみをもって接する更科が、コタンの学校の先生になってくれることを歓迎しました。更科は、子どもたちと楽しく充実した毎日を過ごします。

ある日、弟子屈村内の全教員、釧路国支庁教育課の視学（教育行政官）が出席する教育研究会があり、当番校の教員の歴史の研究授業で「坂上田村麻呂」の蝦夷征伐が教材として取り上げられました。授業が終わって研究会が始まり、視学の教育一般論の講義の後、研究授業の質疑応答がありました。

更科は質問に立ちます。「かつて蝦夷（えみし）即ちアイヌは北陸一帯から東海道の平和に生活していたのではありませんか。皇室に背いたというが、言葉も通じない文化の程度も全く異なる者が、集団で武器を振りかざして攻められたら、これを防備して種族の安全を考えるのは当然なことではないでしょうか。叛（そむ）いた具体例をご教示ください。（略）私も学校でこの教材を教えなくてはなりません。―お前たちの祖先が背いたので（略）北海道へ追い立てられたのだ―とどうして教えられましょう（後略）」歴史は、戦いに勝った者たちが一方的優位につくるものだと更科は思うのです。

当時は、皇国史観に反する言動をする者は思想的偏向者、強いては非国民でした。視学は、地位を利用した小ざかしい行動に出ます。特高警察に身辺を内偵させ、更科が文学仲間たちと交遊していることを口実に、教員不適格者として教育現場から排除したのでした。

※錦織駿介…弟子屈中学校長を最後に教員生活を終え、1968（昭和43）年から1972（昭和47）年まで弟子屈町教育長を務めた。